

幼い子を持つ保護者を対象とした薬局薬剤師の対応に 関する意識調査

A survey about the attitude of pharmacists working in pharmacies to the parents of young children

齋藤美穂^{1,2} 有田悦子^{*2}

Miho Saito^{1,2}, Etsuko Arita^{*2}

キーワード：幼い子を持つ保護者、薬局薬剤師、不安軽減

Keywords ; parents with young children, pharmacists working in pharmacies, reduction of anxiety

要旨：薬局は、子供が病気になった時に保護者が最後に利用する医療提供施設であり、薬剤師の対応により保護者が抱く不安の軽減につながる事が期待される。そこで本研究では、幼い子を持つ保護者を対象として薬局薬剤師の対応に関する意識調査を行った。

調査は、0歳～6歳未満の子供を持つ保護者270名を対象とし、無記名任意回答式質問紙法にて実施した。

その結果、子供が病気になった時に利用した薬局における薬剤師対応で「安心した経験がある」と答えた保護者は77%おり、回答内容をカテゴリ分類したところ<十分な説明><具体的なアドバイス><十分な確認><処方医への確認・疑義照会><良好なコミュニケーション><医師との仲立ち><子育て経験者としての助言>などがあげられた。

一方で「不安になった経験がある」と答えた保護者は27%おり、<説明不足><確認不足><医師への安易な確認><医師の説明との食い違い><不良なコミュニケーション>などがあげられた。

以上より、病気の子供を抱えて薬局を利用した保護者の不安軽減には、薬剤師としての専門的な知識や技術は勿論のこと、具体的なアドバイスの有無や処方医との関係、態度や言葉がけなどのコミュニケーションが影響することが明らかとなった。また、薬剤師自身の子育て経験談なども関係性構築には有用であることも示唆された。

Abstract ; The pharmacy is the final medical institution that parents use when their children are sick, thus it can be expected that the interaction with the pharmacist can lead to the reduction of anxiety of the parents. Thus, in the present study, we administered an attitude survey to parents of children concerning the interaction of pharmacists working in pharmacies.

We administered anonymous voluntary questionnaires to 270 parents of children aged 0 to 6 years.

The results of the questionnaire showed that 77% of parents responded that when their children were sick, they "had a reassuring experience" in dealing with pharmacists working in pharmacies. The contents of the responses were categorized in the following groups: "sufficient explanation," "specific advice," "sufficient verification," "check and inquiries made to the prescribing physician," "good communication," "intermediation between parent and physician," "advice as a person with parenting experience," etc.

By contrast, 27% of parents responded that they had "experience feeling uneasy" due to reasons such as "insufficient explanation," "insufficient verification," "careless confirmation with the physician," "discrepancy with the explanation of the physician," and "poor communication."

The above results revealed that in addition to the specialized knowledge and skills as a pharmacist, the giving of specific advice, the relationship with the prescribing physician, and the attitude and communication including encouragement of the pharmacist influenced the reduction of anxiety in parents with sick children who visit pharmacies. The results also suggested that the personal parenting experience of the pharmacist is useful in relationship building through sharing child rearing stories.

所属：1 (株)横浜菊名薬局

2 北里大学薬学部薬学教育研究センター 医療心理学部門

1 Yokohama Kikuna Pharmacy Co.,Ltd

2 Department of Medical Psychology, Pharmaceutical Education Research Center, Kitasato University School of Pharmacy

1. 緒言

厚生労働省の調査によると、1991年以降子供の数は穏やかな減少傾向にあり¹⁾、子供のいる世帯のうち80%弱が核家族である²⁾。

同じ年頃の子を持つ者同士の会話は共感することも多く育児に関する不安軽減の大きな要素となるが、育児を手助けしてくれる人の不在や近隣社会からの孤立、親同士のつながりの希薄化は子育ての不安やストレスを高じさせる要因にもなり、核家族化の進行により育児に対する母親たちの負担感がより強まっている^{3) 4)}。

育児中の母親を対象とした調査では、子供が病気になったときの母親の育児ストレスは健康な時より高く、母親の日常生活に関わる不安を理解し心理面への支援を行うことは母親自身の健康維持に重要であることが明らかになっている^{3) 5)}。また、子供が病気になった時の保護者の不安軽減には、かかりつけ医の存在や急病時に相談可能な薬局や薬剤師の確保に加え、医療関係者の保護者への対応改善の重要性も指摘されており^{6) 7)}、患者に信頼される薬局薬剤師になるためには、接遇面の強化、服薬指導の質の向上が必要である⁸⁾。

患児の家族への指導は、診察を終え落ち着いて考えることができる“帰宅時”が効果的であることが明らかになっており⁹⁾、子供の診察を終えた保護者が最後に利用する医療提供施設である薬局での薬剤師の対応が保護者に与える心理的影響は大きいことが推測される。

そこで本研究は、幼い子を持つ保護者を対象として薬局薬剤師の対応や要望に関する意識調査を行い、子供が病気になった時に保護者が安心した対応、不安になった対応を明らかにすることによって、保護者の不安軽減につながる薬局薬剤師のあり方を検討することを目的として行った。

2. 対象および方法

2-1. 調査対象および調査期間

2013年5月～6月に、0歳～6歳未満の子を持つ保護者計270名を対象として無記名任意回答式のアンケート調査を実施した。

2-2. アンケート調査方法

対象となる保護者に対して研究の主旨を説明した文書と無記名任意回答のアンケート用紙を配布し、郵送にて回収した。本研究は自由意志で行い、アンケートへの回答をもって研究への同意とした。

2-3. 調査項目

調査項目は先行研究^{4) 5) 10)}を参考に作成し、選択肢及び自由記述とした。

下記に代表的な質問項目を示す。

- I. 基本情報：年齢、性別、職業（以上、単一回答）、家族構成（複数回答）
- II. 子供が病気になった際の相談相手（複数回答）、かかりつけ薬局の有無とその理由（自由記述）
- III. 子供が病気になった際の薬局薬剤師の対応
安心した経験、不安になった経験の有無とその内容（自由記述）
- IV. 子供が病気になった際の薬局や薬剤師への要望（自由記述）

2-4. 検討方法

質問紙で得られた回答のうち、選択肢の回答は単純集計し、自由記述として得られた回答に対して1名の研究者が要約的内容分析を行い、抽出した内容から類似する回答を集めてカテゴリ分類を行いカテゴリに名称を付した。その分析結果を3名の研究者が独立して確認し、合意が得られなかったカテゴリ分類及び名称については改めて合意に至るまで議論し確定した。

本文中では、大カテゴリを【 】, 小カテゴリを< >、自由記述から抜粋した内容を〈 〉で示した。

2-5. 倫理的配慮

本研究は無記名式任意アンケート方式であったが、個人的内容に関わる質問項目も含まれていた為、北里大学北里研究所病院研究倫理委員会の承認を得て実施した。

3. 結果

3-1. アンケート回収率および回答者背景

保護者270名に配布し、126名より回収（回収率47%）した。回答者背景については、表にまとめた（Table1）。

3-2. 子供の病気や薬に対する相談相手

子供の病気や薬に関する相談相手を複数回答で質問したところ、「医師」90%、「配偶者」58%、「ネット」53%、「親」47%、「友人」41%、「薬剤師」39%、「看護師」30%、「医療事務」1%、「その他」2%であった。

3-3. かかりつけ薬局の有無

かかりつけ薬局の有無とその理由を質問したところ、「あり」が76人（62.8%）「なし」が45人（37.2%）であった（Table1）。かかりつけ薬局がある人の理由としては、「受診病院の近く」が多かったが、「履歴がある」「顔なじみである」「初回手続きが面倒」「在庫の関係」などもあげられた。

Table 1 回答者背景

回答者		n	%
性別	男性	3人	2
	女性	123人	98
年齢	20代	7人	6
	30代	92人	73
	40代	27人	21
職業	有職者	28人	23
	専業主婦	93人	77
家族構成	核家族	117世帯	93
	二世帯	6世帯	5
	シングル	3世帯	2
かかりつけ薬局 あり		76件	62.8
かかりつけ薬局 なし		45件	37.2

3-4. 薬剤師の対応により安心した経験、不安になった経験（Table2、3）

病気の子供の薬をもらいに薬局を利用した時の薬剤師の対応について質問したところ、安心した対応の経験が「あった」と答えた保護者は77%であった。

「薬剤師の対応により安心した経験」の回答内容を「専門的な見地からの説明」（34）「飲ませ方のアドバイス」（13）「専門的な見地からの確認」（11）「疑義照会」（7）「医師との仲立ち」（6）「子育て経験者としての対応」（6）「言葉による安心」（3）「態度による安心」（24）の8個の小カテゴリに分類した。

小カテゴリの分類は以下の基準で行った。

〈薬の説明を丁寧にしてくれた〉〈ジェネリック医薬品の説明を詳しくしてくれる〉などは、薬学的知識を必要とする内容の説明と考え「専門的な見地からの説明」とした。

〈月齢に合った飲み方を教えてくれる〉〈薬を飲みたがらない子へのアドバイス〉などは子供が薬を服用しやすくなるための工夫と考え「飲ませ方のアドバイス」とした。

〈お薬手帳を見て飲み合わせをアドバイス〉〈症状を確認してくれる〉などは、薬剤師としての確認事項を「専門的な見地からの確認」とした。

〈薬の量が多すぎないか医師に確認〉〈卵アレルギーでも大丈夫な薬への変更〉など医師への問い合わせが必要なことについては「疑義照会」とした。

〈医師に聞きづらい質問に答えてくれた〉〈セカンドオピニオン的に聞いている〉など医師に聞けなかった質問や、医師の言葉だけでは納得できないと考えられる回答は「医師との仲立ち」とした。

〈子育て経験を踏まえて親身に話してくれた〉〈子育てが終わったベテランの方の励ましの声掛け〉など子育てのアドバイスを「子

育て経験者としての対応」とした。

〈下の子にうつらないと良いですね〉〈回復傾向なら声をかけてくれる〉など前向きな言葉がけは「言葉による安心」とした。

〈信用できる雰囲気〉〈心から心配してくれた〉〈親身になって聴いてくれた〉など、態度や話すスピードなど非言語的なもので安心した気持ちを感じるカテゴリを「態度による安心」とした。

次に小カテゴリを内容ごとに【説明】（「専門的な見地からの説明」と「飲ませ方のアドバイス」）、【確認】（「専門的な見地からの確認」）、【医師との関係】（「医師との仲立ち」と「疑義照会」）、【体験談】（「子育て経験者としての対応」）【コミュニケーション】（「言葉による安心」と「態度による安心」）の5個の大カテゴリにまとめた。

不安になった対応の経験が「あった」と答

えた保護者は27%であった。

「薬剤師の対応で不安になった経験」の回答内容を、「専門的な見地からの説明不足」（4）「専門的な見地からの確認不足」（7）「医師との説明の食い違い」（7）「医師への安易な確認」（2）「言葉による不安」（4）「態度による不安」（11）の6個の小カテゴリに分類した。

小カテゴリの分類は以下の基準で行った。

〈質問に答えてくれず帰宅後インターネットで調べた〉〈薬に関して口頭での説明がなかった〉など薬学的知識を必要とする内容の説明が足りないための不安を「専門的な見地からの説明不足」とした。

〈履歴を全く見ていない〉〈アレルギーを確認していない〉など薬剤師としての確認不足を「専門的な見地からの確認不足」とした。〈医者への指示と違う〉〈医師の説明した薬効と

Table 2 薬剤師の対応により安心した経験

大カテゴリ	小カテゴリ	件数	アンケートの回答（抜粋）
説明	専門的な見地からの説明	34	・薬についてとても詳しく丁寧に説明してくれた ・新しい薬が出る時は詳しい説明をしてくれること ・ジェネリック医薬品の説明を詳しくしてくれた ・ステロイドを集中的に使う方が結果的に早く治るとステロイドの使用を肯定的に説明してくれた
	飲ませ方のアドバイス	13	・薬を嫌がって飲まない子へ、色々な飲ませ方のアドバイスを下さった ・月齢にあった飲ませ方など教えてくれた
確認	専門的な見地からの確認	11	・必ずその日の症状を確認してくれる ・飲んでる薬があるかなどをチェックしてくれた
医師との関係	疑義照会	7	・子どもが卵アレルギーだったので、卵を使わない別の処方箋を出すようお願いしてくれた ・わからない点を先生に電話して聞いてくれた
	医師との仲立ち	6	・医師から副作用の説明を受けたが、不安が残っていたので薬剤師に聞いたら、資料を調べ丁寧に教えて下さった ・ジェネリック医薬品の説明を詳しくしてくれた
コミュニケーション	言葉による安心	3	・上の子が病気の時“下の子にうつらないと良いですね”と気をつけてくれた ・回復傾向の時、声をかけてくれた
	態度による安心	24	・信用できる雰囲気だった ・病気の症状について話した時に“とても辛かったですね”と心から心配してくれた ・親身になって話を聞いてくれた
体験談	子育て経験者としての対応	6	・“大きくなったら治っていきますよ”と見通しの持てる声かけをしてくれた ・ご自身の子育て経験を踏まえて話してくれた

Table 3 薬剤師の対応により不安になった経験

大カテゴリ	小カテゴリ	件数	アンケート回答 (抜粋)
説明	専門的な見地からの説明不足	4	・薬に対する質問にきちんと回答してくれなかったため、結局帰宅後インターネットで調べた ・薬の袋や紙に回数や量は記入してあったものの薬剤師本人からの口答説明がなかった
確認	専門的な見地からの確認不足	7	・継続しているのに、履歴をまったく把握していない ・アレルギーを確認せずにヤクルトを手渡された
医師との関係	医師との説明の食い違い	7	・病院で医師に説明された薬の効き目と薬剤師の説明に違いがあった ・医師の指示と違うことを言われた
	医師への安易な確認	2	・すぐに“病院の先生に聞いてみます”と言う
コミュニケーション	言葉による不安	4	・“どうしたのですか？”と聞くけど何かを話してくれるわけでもなく、なぜ聞いてくるのか理解できない ・“ステロイドの副作用はご存知ですか”と言われた
	態度による不安	11	・淡々と厳しく説明された ・質問に答えたら、首を傾げられた ・説明が早口で良く分からなかったため、もう一度聞いたところ「だからあ」と不機嫌に、更に早口でまくしたてられた

違うことを説明された) など処方医との説明の違いによる不安を《医師との説明の食い違い》とした。

《すぐに病院に聞いてみます》という薬剤師としての責任放棄ととられる回答を《医師への安易な確認》とした。

《どうしたのですか？と聞くだけ》《ステロイド剤の副作用はご存知ですか？》など、意図の不明な「開いた質問」や不安にさせる表現によって保護者が不安になったと思われる回答を《言葉による不安》とした。

《淡々と厳しく説明された》《質問に答えたら首をかしげた》《不機嫌に早口でまくしたてられた》など、明らかに不愉快な態度により不安を感じる対応を《態度による不安》とした。

次に小カテゴリを【説明】(《専門的な見地からの説明不足》)【確認不足】(《専門的な見地からの確認不足》)【医師との関係】(《医師との説明の食い違い》と《医師への安易な確認》)【コミュニケーション】(《言葉による不安》と《態度による不安》)の4つの大カテゴリにまとめた。

3-5. 薬局、薬剤師への要望 (Table 4)

薬局や薬剤師への要望としては「待ち時間

短縮」「詳しい説明」が多く、そのほかに「服用方法の工夫」「専門的な見地からの確認」「対応する時の態度」「共感・励ましなどの言葉がけ」「薬局の環境」などがあげられた。

4. 考察

本研究は、幼い子供を持つ保護者を対象として、子供が病気になった時の薬局や薬剤師の対応に関する意識調査を行い、保護者の不安の軽減につながる薬局薬剤師のあり方を考える際の基礎資料とすることを目的として行った。

今回の調査では「かかりつけ薬局がある」と答えた保護者は約6割いた。患者が薬局を評価する際には「人的要因・利便性・環境要因」を重視し、このうち総合的な評価に最も強く影響を与えているのは「人的要因」であるとの報告があるが¹¹⁾、今回の調査結果では《顔なじみである》《慣れているから》など「人的要因」を理由にあげる保護者は少数であった。一方で、《病院の近くの薬局に行かないと在庫がない》《履歴がある》《初回アンケートの再度の記載の必要がない》《待ち時間の目安が立つ》など薬局の「利便性」や

Table 4 薬局・薬剤師への要望

説明	<ul style="list-style-type: none"> ・効果的な服用方法や副作用についての説明 ・こちらから聞かなくても、継続して服用している薬との併用可能か教えて欲しい ・朝晩で薬の数が違う時は、一言説明してもらえるとこちらも間違えない ・以前に飲んだ薬であっても、副作用は、毎回口頭で伝えて欲しい ・一つ一つの薬がなぜ必要か教えて欲しい 	言葉	<ul style="list-style-type: none"> ・来るのが遅すぎ…というようなダメ出しはしないで欲しい ・子どもには一言“辛いけど頑張ろうね”などの応援と、親にも“大変ね”など一言でいいので声をかけて欲しい ・事務的でなく、笑顔で“頑張って薬飲んで”と帰る時に手を振ってくれると、子どもも喜んで薬を飲むうえ親としても安心 ・共感や前向きな言葉が欲しい
飲ませ方のアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・“毎食後服用”とされている薬でも子どもにスムーズに飲ませるためには食前でも“可”など、飲ませるコツを教えて欲しい 	態度	<ul style="list-style-type: none"> ・病院と同じことを言うのが面倒なので、再度症状を聞かないで欲しい ・困ったことはないかと、聞いてもらうとありがたいが、デリケートな話まで、聞くことはやめて欲しい ・子どもが小さいうちは、座っている席まで薬剤師が来てくれると助かる
確認	<ul style="list-style-type: none"> ・薬の説明書の、“要”“不要”を確認して欲しい ・高熱が出ている時は、今ここで薬を飲んで帰りたいか聞いて欲しい 		薬局の環境
医師との関係	<ul style="list-style-type: none"> ・ちょっと、おかしいと思う事は、患者にあれこれ言われてもわからないうえ、不安になるので、医師と連絡を取って対応して欲しい ・医師からどのような説明があったか確認して欲しい。 	時間の短縮	<ul style="list-style-type: none"> ・子供も病気で、親も疲れているので、早く家に帰りたいので迅速な対応をして欲しい ・初めての薬ではない場合、説明は手短かにして欲しい

「環境要因」が多くあげられた。今回の調査対象は幼い子供をもつ保護者であった為、子供が病気になった時に薬局の「利便性」や「環境要因」をより重視するのは当然であるが、患者や家族との継続的なやり取りにより相手の心情や生活環境を把握することは「かかりつけ薬局」として患者からの信頼を得るための要素の一つと考えられ⁸⁾、幼い子供を持つ保護者にとって「人的要因」になれるような薬剤師を目指し対応の向上も必要であろう。

薬剤師の対応により安心した経験、不安になった経験について聞いたところ、共通の大カテゴリとして【説明】【確認】【医師との関係】【コミュニケーション】があげられ、安心した経験の特徴的なものとして【体験談】があげられた。

【説明】では、薬の飲み方や効き目、副作用などについて「専門的な見地からの説明」があると安心すると答えた保護者が一番多く

見られ、質問に答えてくれなかった、薬剤師からの説明がなかったなど「専門的な見地からの説明不足」だと不安になることが示された。また、対応により安心した経験として月齢にあった飲ませ方の工夫や薬を嫌がる子への飲ませ方など「飲ませ方のアドバイス」もあげられた。

先行研究においても、子供に上手に薬を飲ませられないことで親自身が親としての役割を果たせていないと落ち込んでいる場合があり、薬剤師としては親を責めるような言葉にならないように留意し、内服の具体的な工夫をできるだけ多く伝えることの重要性が報告されており¹²⁾、薬剤師の説明やアドバイスが保護者へ及ぼす影響の大きさが推察された。

【確認】では、症状、併用薬、アレルギーや履歴などの「専門的な見地からの確認」を十分にしてもらえると安心し不十分だと不安に感じる事が明確になり、薬剤師としての

専門的な知識の向上が安心できる対応の前提条件であることが示唆された。

【医師との関係】では、医師に聞けなかったこと、聞きづらかったことを薬剤師に聞いて詳しく説明してもらうことで安心を感じるという回答が多くみられ、薬剤師が保護者と医師との橋渡し役として果たす役割の重要性が示唆された。

一方、不安になった経験としては〈医師から受けた説明と薬剤師のする説明が違う〉などがあげられ、医師と薬剤師の関係性が保護者の安心感に影響を与えていた。また、薬剤師が医師に確認する内容を具体的に保護者が把握していると安心と感じ、薬剤師が安易に医師に確認する対応をとると不安に感じることも明らかとなった。

以上より、保護者に医師からの説明内容や疑問を確認するなど保護者とのコミュニケーションはもとより、処方医とのコミュニケーションの重要性も示唆された。

【コミュニケーション】では、薬剤師の対応で安心できた経験として〈信用できる雰囲気だった〉〈心から心配してくれた〉〈親身になって話を聴いてくれた〉など〈態度による安心〉をあげる保護者が多かった。一方、不安になった経験としても〈首を傾げられた〉〈早口でまくしたてられた〉など〈態度による不安〉があがっていた。一般に、言語メッセージで伝達される情報量よりも態度や話すスピードなど非言語メッセージによって伝達される情報量の方が大きいことから¹⁴⁾、薬剤師は自ら発する非言語メッセージに配慮する必要性が改めて確認された。

言語的なものとしては、〈どうしたのですか？と聞くだけ〉〈ステロイドの副作用はご存知ですか？と言われた〉など、意図の不明な質問や不安にさせる表現などがあげられた。患者家族を対象とした調査によると、家族は治療や苦痛の体験をしないため不安が想像によって限りなく広がってしまうことが指

摘されており¹⁵⁾、薬剤師の不用意な発言で不安が増長してしまわない様に対応には十分な配慮が必要である。

薬剤師の対応により安心した経験のみにみられた【体験談】としては、〈大きくなったら治っていきますよ〉〈大変だけど頑張ってる〉など薬剤師自身の育児体験を踏まえたアドバイスや声掛けがあげられていた。育児相談やアドバイスをしてくれる相手が少ない環境のなかで、子供の日常生活を踏まえた思いやりのある対応は薬剤師への信頼関係の構築につながり¹³⁾、実体験に基づき保護者の心情を理解できる薬剤師は、かかりつけ薬局の「人的要因」となる可能性も示唆された。

最後に「病気の子供を抱えた時の薬局・薬剤師への要望」について考察する。要望としてあげられた内容は、薬剤師の安心した対応としてあがった〈説明〉〈服用方法の工夫〉〈確認〉〈医師との関係〉〈コミュニケーション〉などと同様の内容であり、保護者が望む薬剤師のあり方が反映されていると考えられる。また、〈座席まで行つての投薬〉や〈子供が動き回っても安全な場所での投薬〉など薬局の『環境』や〈子供は病気で親は疲れているので、早く帰りたい〉〈初めてではない薬の説明は手短かに〉など『時間短縮』に対する要望もあがっていた。話しやすい環境作りなど薬局側の工夫で患者は相談しやすくなることが指摘されており¹⁶⁾、薬局としての環境整備も重要である。

5. 結論

今回の調査より、子供が病気になった時の保護者に対応する際には、薬剤師の専門的な職能を基盤とした上での傾聴の姿勢や共感的な態度など非言語的なコミュニケーションが重要であることが再確認された。さらに病院から独立した医療提供施設である薬局ならではの医師との橋渡し役や、薬剤師自身の子育ての体験談なども保護者の不安軽減に役立つ

ことが示唆された。

今回は就学前の子育て中の保護者を対象としたが、保護者の就業状況や家族構成など育児環境の違いによる検討は行っていない。今後は、これらの背景要因についても考慮し、子育て中の保護者にとって心の拠り所となる薬局薬剤師のあり方について更に検討を続けていきたい。

謝辞

本研究にあたり、調査にご協力いただきました幼稚園、保育園の保護者の皆様、ご指導を賜りました諸先生方に深く感謝申し上げます。

[引用文献]

- 1) 厚生労働省、平成26年人口動態統計、
(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/81-1a2.pdf>) 最終アクセス2014.08.21
- 2) 厚生労働省、平成25年国民生活基礎調査
(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/>) 最終アクセス 2014.08.21
- 3) 荒賀直子、白石安男、元永拓郎、アトピー性皮膚炎患児の母親の心理面への支援、順天堂医学、47 (4)、508 - 518|2002|
- 4) 櫻谷眞理子、今日の子育て不安・子育て支援を考える～乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通して～、立命館人間科学研究、7、75-86|2004|
- 5) 丸光恵、兼松百合子、中村美保、工藤美子、武田淳子、慢性疾患患児を持つ母親の育児ストレスの特徴と関連要因—健康時の母親との比較—、千葉大学看護学部紀要、119、45-51|1997|
- 6) 下開千春、乳幼児の救急医療に対する保護者の不安とその要因—埼玉県の4市町の調査から—、日本公衆衛生雑誌、52 (4)、349 - 355|2005|
- 7) 丹佳子、子どもの急病時の対応や判断についての保護者の考え—自由記述からみた不安・安心・対処行動・社会への要望—、日本公衛誌、54 (10)、711-722|2007|
- 8) 櫻井秀彦、薬局における患者と薬剤師の医療サービスに対する意識に関する研究、薬学雑誌、129、557-568|2009|
- 9) 松廣香織、細井千春、小児救急外来における家族のケア能力を高めるコミュニケーションスキル、小児看護、3 (13)、1753-1758|2010|
- 10) 井上裕、斎藤麗美、金木郁男、他、薬局薬剤師と患者間の対応に関する意識調査、日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会誌、10 (2)、16-22|2012|
- 11) 櫻井秀彦、中島史男、多田裕一郎、芳川江美、岩橋芳樹、藤田健二、早瀬幸俊、薬局における処方せん調剤を目的として来局した患者の満足度に影響を与える薬局機能・サービスに関する研究、薬学雑誌、129(5)、581-591|2009|
- 12) 田畑久江、看護師が“困っている親”に対する際のポイント、小児看護、35(3)、318 - 323|2012|
- 13) 片瀬創平、岸本桂子、海老原毅、米原明、長瀬美香、福島紀子、ADHDを有する子供の親が抱える薬物治療への不安に関する質的研究、日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会、13 (1)、19 - 30|2015|
- 14) 中野重行、医療コミュニケーションの学習と模擬患者 (SP)、薬理と治療、38 (12)、1077 - 1088|2010|
- 15) 町田いづみ、患者・家族心理と医療コミュニケーション、薬事、148、25 - 30|2006|
- 16) 染谷文洋、詫間浩樹、泉澤恵、白神誠、患者薬剤師への相談ニーズ、薬学雑誌、129 (9)、1137-1140|2009|